国語

「物語のヒミツをさぐろう」

中１年Ｂ組
授業者　荻野　聡

１．単元の構想

（１）子どもの実態（ステージ・ステップをふまえて）

対象学級の子ども達は、非常に素直な反応が多く、知的好奇心が高い学級である。中学一年という発達段階から、第３ステージ・ステップ６にあたる発達段階である。この時期の子どもは、集団と自分との関わりのなかで、自分とは何かを意識する時期にあたる。

四月から、子ども達は「風呂場の散髪（『岳物語』）」、「字のない葉書」、「竹取物語」、「宇治拾遺物語」を学習してきている。それぞれの教材で学習した内容の概略は以下の通りである。

○「風呂場の散髪（『岳物語』）」
→描写に着目することで、作品をより読み味わえることを経験した。「脱皮の季節」、「わたしの顔を見ようとしない」「成り行き上」、「夜ふけのぬるいコーヒー」といった描写を細かくとらえることで、そこに込められた筆者の表現意図や、微妙な心情のゆらぎを読み取った。

○「字のない葉書」
→描写に着目して読み解いた。「紙いっぱいはみだすほどの威勢のいい赤鉛筆の大マル」、「急激に小さくなっていった」、「裸足で表へ飛び出した」、「声を上げて泣く」などの描写を追っていった。また、末尾の段落「だれがどこにしまったのか、わたしは一度も見ていない。」という筆の置き方から、読者に考えさせる余地をあえて残して文章を終える（余韻を残す）という書きぶりの工夫に気づいた。

○「竹取物語」
→昔話「かぐや姫」との違いを導入として、原作「竹取物語」を読み進めた。「竹取物語」にちりばめられている言葉遊び（「竹の子・籠」「鉢・恥を捨てる」「貝・甲斐なし」「富士・不死・不尽の山」）を見つけ、作者の意図を推察する手がかりとした。また、「理想郷として描かれている月の世界と、地上の世界とどちらに住みたいか？」をテーマに、話し合いを行い、作者がどういう意図で物語を書いたのか、想像を巡らせた。

○「宇治拾遺物語」（第１０４段）
→狸が扮した普賢菩薩に気づかず拝み続ける「聖」と、偽の普賢菩薩の正体を鋭く見抜く「猟師」の物語から、どのような教訓を伝えようとしているのか、想像して話し合った。

子ども達は、それぞれに自由な発想をめぐらせており、時に教師が思わず唸ってしまうような鋭い発言が飛び出すことがしばしばである。挙手が大変多く、毎回時間がなくなるまで挙手が止むことがないのが、この学級の子どもたちの特徴として挙げられる。その一方で、時にテクストの読み込みが浅く、思いつきや思い込みによる発言も散見され、根拠を伴わない意見が出てくることも多い。

そのため、四月からの授業では、テクストの叙述に即した「読み」を行うように指導を重ねてきた。子どもの発言に対してそのまま板書をするのではなく、「それはどうして？」「どこに書いてあった？」

と問い返すことや、「ああ、確かにどこどこに書いてあることとつながるね。」などとテクストの叙述を関係づけていくことに重点を置いてきた。

（２）教材について

本単元では、四月から学習してきた「物語」の学習を活用し、小グループに分かれて物語を読み込み、複数の物語に共通する構造や、出来事のはじまりと結びの描き方の工夫などを見つけていく学習活動を組んだ。

本単元は、四月から学習してきた単元を総括する位置づけの単元であると同時に、小学２年生と合同で学習する単元と結びつけることを前提とした単元である。本単元で物語の基本的な構造の仕組みや、作中に表れる作者の工夫などに触れることで、小学２年生との合同授業の際に活用できる引き出しとなっていることを期待したい。

小学２年生との合同授業では、小・中を一緒にした小グループに分かれて、自分たちが選んだ物語の一場面をアレンジして考えるか、後日談を考えるという学習活動を予定している。

小学２年生は、６月にキッズフェスティバルという行事のために、中心となってお話づくりを進めた経験がある。自分たちが物語作りに真剣に取り組んだ経験があるからこそ、中学生と一緒のお話づくりにも意欲的に取り組むことができるだろう。中学生にとっては、理屈が優先して物語を分析するだけでは、魅力的な物語にはならないということを実感する機会となるだろう。小学生ならではの柔軟な発想や、中学生の発想を率直に批判する小学生の視点は、中学生にとって、貴重な学びとなることだろう。また、そこで感じた苦労や困難さにいつも直面している童話作家や絵本作家の巧みさに気づくきっかけにもなるかもしれない。教室での学びを実の場で活用することで、自らのもつ物語観をゆさぶられ更新していくことを合同授業でのねらいと考えている。

（３）本単元における「学びを深める子どもの姿」とは

本単元では、自ら物語に積極的に親しもうとし、学習した内容をいかして作品の工夫や面白いところを探っていこうとする姿を「学びを深める子どもの姿」として考えた。文学的文章を読み味わうだけではなく、そこに表れている工夫や仕掛けなどを見つけて一般化して考えていくことで、作り手側の意図や仕掛けられた意趣に気づけるようになっていくことを期待している。

（４）本実践で育成を目指す資質・能力

本実践で育成を目指す資質・能力は次の２点であると考えた。

①物語を主体的に読み味わう態度や視点をもつことができる

本実践では、「物語」を読み味わうために、その描写に着目すること、登場人物の心情の変化に着目すること、全体の構造に着目することを経験させている。細部に目を向け、描写の巧みさや表現上の工夫、登場人物の心情の移り変わりの描き方などに気がつくようになるなどの「ミクロの視点」と、物語全体を俯瞰して構造をとらえたり、他の物語との共通点や相違点を見つけたりするなどの「マクロの視点」とを獲得しながら、主体的に物語を読み味わおうとする子どもの姿を期待したい。

②他者と自分との感じ方の違いや視点の違いを交流して楽しむことができる。

本実践では、多様な物語を一度は、それぞれ別に読みながら、二次的にそれらを「物語」というジャンルで串を通してとらえるという試みを行っている。現代小説として「風呂場の散髪」(『岳物語』)、古典の物語として『竹取物語』、説話として『宇治拾遺物語』、と学習した後に、幼児・児童向けの物語と

して「わんぱくだんシリーズ」を数冊読むことにした。「わんぱくだんシリーズ」をピックアップした意図は、シリーズを通して、全作品で共通して「くみ・けん・ひろし」の三人が主人公であること、また、ほぼ全作品で「現実→非現実→現実」の構造をとっており、教材として適切であることにある。また、作品の内容が、小学２年生がキッズフェスティバルのために作った物語と似通っているものが多いこともこのシリーズをピックアップした要因の一つである。

（５）手立て（学びを深める場をつくる）について

物語教材と古典教材を「物語」という視点でくくって考えるという視点を設定した。現代小説と古典の物語や説話集ということで性質は違えど、そこには人物設定や状況設定やストーリー展開など、いくつもの共通項がある。子どもには、物語を味わいながらも、それらを俯瞰的に見渡す視点をもたせたいと考えた。そこで本単元では、あえて児童用の絵本を教材として提示することで、子ども達が物語全体を見通しやすいようにした。また、教材としてセレクトした絵本は、どれも小学生のキッズフェスティバルのストーリーと相通ずるものとした。三学期に行う小学生との合同授業に向けての土台となることを期待したい。

（６）連携カリキュラムとの関連

国語科連携カリキュラムにおいては、「読むこと」（文学的文章）の領域で、「経験した方法を活用」して読み深めたり、「同じジャンルの作品」を読み比べて、その特徴や面白さに気づいたりしていく時期である。これまでの学習経験から、一つのテクストを熟読してその世界観に存分に浸ることを経験してきている子ども達に対して、本単元を通じて、「物語」というジャンルのテクストに対して、より理解を深め、より味わえるようになってもらいたいと考えた。

２．単元の計画と経緯（全５時間　本時　５/５）

（１）単元の目標

・物語を読み比べ、その特徴や描かれ方の魅力について知ることができる。
・交流を通じて、自分とは異なる物の見方にふれることができる。

（２）単元計画

第一次　「風呂場の散髪」を読んで、情景描写から、人物の心情の変化を読み取る。
第二次　①「竹取物語」を読み、昔話「かぐや姫」との違いを理解し、あらすじをつかむ。古文にふれ、ことばの使い方や音のひびきを味わう。
②『宇治拾遺物語（第１０４段）を読み、人物同士のやりとりや展開の面白さに気づく。また、物語にこめられた教訓を想像する。
第三次　「わんぱくだん」シリーズを読み、物語の構成や読者を引きつける工夫について考える。

３．本時の学習指導計画

（１）本時の目標

・物語を読み比べ、その共通点や表現の工夫などに気づくことができる。

（２）本時の展開

○学習活動　・生徒の反応	◎指導上の留意点　☆評価【　】　評価方法（　）
○本時のめあてを確認する。 ○既習の物語を思いうかべ、さまざまな「物語」に何か共通して言えることはないか考える。 ・不思議な生き物や登場人物が出てくる。 ・でも、「風呂場の散髪」には出てこないよ。	◎多くの物語に共通して言えること＝「物語のヒミツ」として、探っていくことを学習課題として伝える。その際、ひとまず既習の物語から何か言えることはないか考えさせる。 ◎「物語のヒミツ」を探るのは、物語を読む視点がより明確になったり、より豊かに味わえるようになったりできるようにするためとし、活動への目的意識をもたせる。 ☆物語の構造をとらえ、比較することができているか。（発言）
○共通資料「わんぱくだんシリーズ」を読み、共通して言えること（物語のヒミツ）は何か考える。 ・どれもどこか不思議な世界に行って、そこで冒険のようなことをしている。 ・主人公が毎回同じ。 ・なにかきっかけがあって、ワープしている。 ・どの作品も、子どもが誰でも経験するような普通の遊びがきっかけになって不思議な体験をしている。 ・冒険から帰ってきた時に、不思議なアイテムを持ち帰ってきていて、夢ではなく本当にあったことなんだということをにおわせている。 ・小さな子が思わずひきこまれそうなテーマを選んでいる。	◎「わんぱくだんシリーズ」のコピーを一作品につき十部ずつコピーして置いておく。読み終わったら戻して次の作品をもっていくようにする。（図書館で本を借りて返す感覚で読ませたい） ◎「これとこれだけに共通する」という狭い範囲での共通点（主人公の年齢が１０歳、など）ではなく、さらに広い視点から探していくように伝える。 ☆作品を読みながら自然と発せられるつぶやきから、友達の意見や気づきの良さを受け入れることができているか。 ☆物語を俯瞰・対象化する視点で考えられているか。 （交流の様子）（机間支援） ◎机間指導をしながら、子どもの発見を見とり、場合に応じて全体に紹介させるなどして、全体で共有することもしていく。
○他の資料を読み、見つけた「物語のヒミツ」は、他の物語にあてはまるか、あるいは他にも「物語のヒミツ」はないか、考える。 ・『おしいれのぼうけん』も不思議な世界に入っていって、最後に帰ってきている。 ・主人公が物語全体をとおして、少し成長していたり、変化していたりする。	◎自分たちが考えた「物語のヒミツ」を、他の物語にあてはめて考えるとどうなるか、という視点で活動をうながす。新しい「物語のヒミツ」を見つけていくことも同時に行わせる。 ☆応用、一般化することができているか。その視点で見た時に物語のとらえ方が変化しているか （交流の様子）（ホワイトボードの記述） ◎一般に言われる物語の基本構造「”行く”と”帰る”」、「”失くす”と”取りもどす”」を紹介し、その視点で考えることも促す。

（文責　荻野聡）